

荻原新八郎 著

呼吸理学療法学

(B5判 278頁 4,635円(税込) 1990年 医学書院刊)

宮城征二郎

(沖縄県立中部病院)

日本における呼吸理学療法学の第一人者であり、長崎大学医療技術短期大学助教授の千住秀明氏とともに情熱的に本邦における呼吸理学療法の実在方を模索・推進してきた著者の力作「呼吸理学療法学」が遂に日の目を見るところとなった。

本書を一読して特に感じたことは、その表現法はやや難解ながら「呼吸理学療法学」を著者が完全にアカデミックな水準に押し上げているということである。

アカデミズムは日本の医療人の最も好む性癖であるが、この著者におけるアカデミズムは患者本位の医療の中でのそれであり、理学療法の実践をより論理的に先鋭化するためのアカデミズムの追求であって、従来の日本の医療人がとってきた姿勢とは大きく異なるところである。

「医学は一流、医療は三流」とよく言われる本邦の医療界の中にあって、著者はその序文の中で、「我々にも三流から一流に向かって努力する権利と義務があること

を銘記したい」と声高に叫ばれておられる。

イギリスやカナダという理学療法学先進国で、御夫人のサンドラさんとともに長くチーム医療のメンバーとして医療活動に従事してこられた著者にとって、日本に充滿しているややもすると医療者本位の医療の在り方には、大きな驚きと戸惑いがあったであろうことは想像に難くない。

と同時に、著者に託された本邦における自らの役割の重大さについても逸早く洞察し得たに違いない。

金沢という北陸の地に身を置きながら、地道に医療活動を続けつつ、その影響力を次第に全国に拡大して行った著者の姿勢には頭が下がるものがある。

本書の中身は著者が日々の教育活動の中から掘み出し、この分野に携わるすべての人々に、重複を厭うことなく繰り返し繰り返し伝えんとする呼吸理学療法学の真髄であり、アカデミズムに裏打ちされた医療の本質であり、かつまた

彼の医療哲学でもある。

臨床家にとって、疾患を取り扱う上で最も大切なことは患者の訴える症状や身体所見を常に病態・生理学的に説明することであるとされているが、一貫して本書に貫かれている著者の姿勢がそれであり、その観察眼の鋭さと確かさは常々「ベッドサイドの呼吸器病学」の重要性を提唱してやまない筆者を驚かしてなお余りあるものである。

通り一遍に読むだけでは、なかなか理解し得ないところもあり、また日ごろ我々日本の医療人が使用している用語と相違する表現法や、我々の理解とはかけ離れた病態・生理学的解釈も多々あって、多少の違和感がないでもないが、実際に症例に即して呼吸理学療法を実践していく場合に、箇書きされた本書の内容を一行ずつ辿りながら参考にして行くと、その含蓄の深さに驚かされるであろう。

そして、著者のように呼吸理学療法士と仕事をともにし得る呼吸器チームはどんなに幸せなことかと思う。

単に理学療法士のみにとどまらず、臨床呼吸器病学に携わるすべての呼吸器科医、看護婦および訪問医療チームのメンバーたちに広く読んで欲しいと願わずにはいられない好書である。

訂正とお詫び

本誌 19 巻 6 号（1991 年）623 頁の「書評」、荻原新八郎著「呼吸理学療法学」の書評者は宮城征二郎氏ではなく、宮城征四郎氏の誤りです。訂正してお詫び申し上げます。